

講演録 王趁意氏提示の三角縁神獣鏡の検証

講師 西川寿勝氏大阪府教育委員会 文化財保護課副主査

日時 2015年12月24日

場所 ハートピア京都 4階

I 検証に至る経緯

HP「中国の三角縁神獣鏡2」で報じたように中国の王趁意氏が「中原文物2014/6」に「洛陽三角縁笠松紋神獣鏡初探」なる論文（全訳文を上述「中国の三角縁神獣鏡2」に掲載済み）で中国はじめて日本の基準で言う三角縁神獣鏡が発見された旨を報じた。

この後を受けて2015年3月2日で朝日新聞が「卑弥呼の鏡？三角縁神獣鏡」と題して同氏の論文の趣旨を発表すると同時に「現地の研究者が入手」ということで疑問視する声もあることを同HPで報じた。

この実情を確認するため。大阪府教育委員会の西川寿勝氏がいろいろ事前交渉を経て、2015年11月23日から27日までの間現地を訪問し現物を詳しく調査された。

II 新聞記事による概報

調査の内容は2015年12月16日朝日新聞、12月18日日本経済新聞で概報が報じられた。

① 朝日新聞記事



日本の前期古墳から出土する三角縁神獣鏡は、邪馬台国の女王・卑弥呼が3世紀半ば、中国・魏から贈られた鏡とも言われる。だが、肝心の中国からは一面も見つかっておらず、日本製か中国製か、製作地を巡る論争が続いている。ところが、この鏡が中国で見つかり、現物を確認した日本人研究者が「中国で出土した可能性が高い」とする見解を24日に京都市内で開かれる研究会で報告することになった。真偽も含め、新たな論争が起きそうだ。

2014年12月、収集家で研究者の王趁意（おう・ちんい）氏が、かつて魏の都があった洛陽（河南省）でこの鏡が発見されたとの論文を現地の専門誌に発表した。しかし、鏡は王氏の手元にあるものの、出土状況が不明な上、実物を見た日本の研究者はこれまでなく、意義付けが難しかった。

そこで三角縁神獣鏡に詳しい大阪府教委文化財保護課の西川寿勝副主査が、今年11月、河南省の王氏を訪ね、問題の鏡の写真撮影や計測を行った。その結果、直径18・3センチの「吾作銘三角縁四神四獣鏡」という種類で、鏡面は硬く分厚い赤色のサビで覆われ、一部に絹織物が付着。二つに割れており、ハンダ付けした後、合成塗料を塗って補修を隠した痕跡があることが分かった。

西川副主査は「文様だけでなく、表面が波打つような研磨方法からも本物なのは疑う余地がない。サビや補修の特徴などから、最近、洛陽付近で出土した可能性が高い。三角縁神獣鏡の製作地を考える新たな資料になる」と指摘する。

一方、日本製説の菅谷文則・奈良県立橿原考古学研究所長は「写真では文様や銘文にやや違和感があり、自分の目で確かめるまで価値判断できない」といい、中国製説の福永伸哉・大阪大教授（考古学）も「本物とみてよいが、出土状況がわからない以上、製作地の決め手にはならないと慎重な見方をしている。」

（大阪本社編集委員 関口和哉）

日本人研究者、近く報告
2015.12.16

三角縁神獣鏡、中国で発見？

② 日本経済新聞記事

中国で初めて見つかったとされる古代青銅鏡「三角縁神獸鏡」を先月、日本の研究者が初めて調査し「贗作(がんさく)ではなく、日本の三角縁神獸鏡と同じ工人在った可能性が高い」とする所見をまとめた。24日に京都市で開く研究会で報告する。

三角縁神獸鏡は奈良県を中心に日本で約560枚が見つかっているが、中国では1枚も出土していなかった。製作地を巡っては、中国で作られたと考え、魏志倭人伝が記す「魏が卑弥呼に贈った銅鏡100枚」とする説と、日本製

三角縁神獸鏡 中国で発見か

日本の研究者調査

とみる説などがあり、今後の議論の焦点となりそうだ。
この鏡は昨年末に刊行された中国の専門誌で現地の収集



中国・洛陽で見つかったとされる「三角縁神獸鏡」西川さん提供

「同じ製作者の可能性」

家が紹介した。魏の首都だった河南洛陽で見つかったとされるが、詳しい状況は分かっていない。

先月下旬、古鏡に詳しい大阪府教育委員会文化財保護課の西川寿勝さんが現地調査した。直径約18センチ、三角縁神獸鏡としては小型という。これまで日本で出土したものは銘文の構成などが異なるが、神獸像や笠松形の文様などに共通点も多い。

赤さびに覆われた様子は周土状況が分ならず、日本から後世に渡った可能性もある(福永伸哉・大阪大教授)など慎重な見方をとっている。

西川さんは「まだ製作地が確定したわけではない」と指摘。周辺で発掘が進めば、新たな手がかりが得られると期待している。

III 西川寿勝氏の講演要旨

はじめに

以下は西川寿勝氏(大阪府教育委員会 文化財保護課副主査)が去る2015年12月24日ハートピア京都にて発表されたご講演の概要である。

本来同氏がHPで発表されたり、書籍で発表されたりするべきものであるが、当面寡聞にしてその種の論文を文責者は知らず、一方この問題に関する関心は研究者の間で非常に高いため、自己と各位の向学のためここに同氏の論文をまとめた。また理解しやすいようにと思い、演説調のものを箇条書きに勝手�に変えさせて頂いた。文責は全て筆者にある。またご本人から変更のご要望あれば、やぶさかでないことをお断りしておく。

文責 平松健

(1) 講師提示の資料

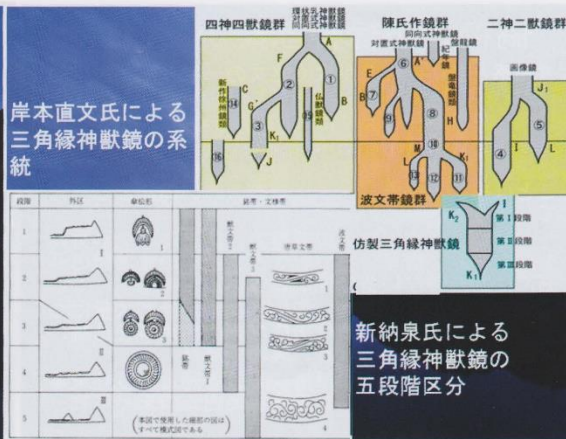
洛陽発見の三角縁神獣鏡実見報告

西川寿勝(大阪府教育委員会)





今回の鏡



7

8

出土古墳	三角縁神獸鏡					三重・桑名(伝)				
	I	II	III	IV	V(仿製)	群鏡・三本木(伝)	2	3	1	
山口・竹島	1	1				群鏡・三本木(伝)			1	
兵庫・吉島	1	3				群鏡・三本木(伝)			2	
兵庫・神前山51号	2	3				群鏡・三本木(伝)			3	
兵庫・西宮大塚	4	3				群鏡・三本木(伝)			3	
兵庫・森尾	1	1				大塚・万寿山	2	2	1	1
大阪・安満宮山	1	1				京都・寺戸大塚			1	1
奈良・黒塚	14	10				奈良・嵯峨塚			1	2
滋賀・古宮渡山	2	1				三重・桑名			1	1
滋賀・栗野山	3					群鏡・三本木(伝)			2	2
愛知・奥津社(伝)	1	2				群鏡・三本木(伝)			1	1
静岡・上平川大塚	1	1				群鏡・三本木(伝)			1	1
群馬・新島子	1	1				大塚・万寿山			1	1
群馬・前橋天神山	2					京都・寺戸大塚			1	1
福岡・石塚山	1	3	3			奈良・嵯峨塚	1	1	1	1
福岡・関口			3			奈良・嵯峨塚	1	1	1	1
大分・赤塚	2	3				群鏡・三本木(伝)			1	1
山口・宮洲	1	1	1			山口・長光寺山			3	
岡山・黒塚	1	8	2			岡山・龍山丸山			1	0
愛媛・広田神社上						大塚・万寿山			1	9
徳島・宮谷	2	1				京都・百々池			1	1
兵庫・東求女塚	2	2				京都・長岡近所(伝)			1	1
兵庫・ヘボン塚	2	2				奈良・新山	1	2	1	3
大阪・石切神社(伝)	1	2				奈良・新山			2	2
京都・椿井大塚山	12	17	3			奈良・新山			2	2
京都・長法寺南所	1	3				奈良・新山			2	2
奈良・雲白山	5	7	3			奈良・新山			2	2
奈良・富雄丸山	1	2	1			奈良・新山			2	2
滋賀・大宮山	1	2				奈良・新山			2	2
三重・桑名(伝)						奈良・新山			2	2
群馬・三本木(伝)	2	1				奈良・新山			2	2
熊本・戸北郡(伝)						奈良・新山			2	2

古墳時代のはじまりは第Ⅱ段階の舶載以降。

福永伸哉氏による五段階の副葬鏡

9



10



11



12

近年、仿製三角縁神獸鏡を国産と考えず、西晋鏡の流れの中でとらえる意見が支持されつつある。

偽物三角縁神獣鏡かどうか？

- ・違和感として、銘帯が太く銘文の一字一字が大きいこと。
- ・後漢・三国時代の鏡では異例の字の大きさ。これに連動して櫛歯紋帯が欠落。
- ・後漢鏡の系譜で、銘帯の外側の櫛歯紋帯が欠落することは極めてまれ。・・・てき悪い偽物とも見えてしまう。
- ・ただし、三角縁神獣鏡の系譜で、銘帯に小乳や方格を配したり、唐草紋を刻むなど、通常の後漢鏡の系譜にはあり得ない多様性が数多い。
- ・三角縁神獣鏡はなるべく多様性をもたせて大量につくろうとした結果、図像構成などの約束事を逸脱、同范鏡が数多くあるなど、異端の鏡群。
- ・今回の鏡の太い銘帯、櫛歯紋帯の省略という約束事の逸脱は三角縁神獣鏡群の許容範囲。つまり本物



13

14

第Ⅱ段階下賜後、第Ⅲ段階成立前につくられた鏡？

- ・第Ⅰ段階を景初三年（239）の朝貢で下賜された「銅鏡百枚」そのものとすれば、第Ⅱ段階は狗奴国と交戦を報告し黄幢を渡された正始四～六年（243～245）の朝貢時、第Ⅲ段階は台与による泰始二年（266）の朝貢時などと推定。
- ・複数副葬で、もっとも古い奈良県黒塚古墳・大阪府安満宮山古墳・兵庫県西求女塚古墳等の場合、第Ⅰと第Ⅱ段階が混在し、245年以降、266年までに古墳が成立することがわかる。理化学分析（放射性炭素法）から推定された年代観とも合致。
- ・今回発見の鏡は第Ⅱ段階の構成でありながら、神像と怪獣の間に乳がある点、図像の隙間を粒々で埋める点など、第Ⅲ段階に定型する要素が先取される。
- ・そうすると、第Ⅱ・第Ⅲ段階の朝貢の間に作られた過渡的鏡か。つまり、倭国に下賜されなかった時期の製作鏡。

三角縁神獣鏡 (型式)	推定製作年代 (西暦年)	下賜の機会 かし	史料
第Ⅰ段階	239～240 243～245	239 卑弥呼遣使 243 卑弥呼遣使	『魏志』倭人伝
第Ⅱ段階	247 250前後	247 郡の使者卑弥呼に告諭 250前後 台与の遣使	『魏志』倭人伝
第Ⅲ段階	266	265 魏滅亡、西晋建国 266 台与の遣使	『魏志』倭人伝 『晋書』起居註 (『日本書紀』神功66年条)
第Ⅳ段階	200年代後半	290 第二代皇帝即位	『晋書』
第Ⅴ段階	300年代初頭 (仿製)	307 第三代皇帝即位 313 楽浪・帯方郡 の滅亡 317 西晋の滅亡	『晋書』 『三国史記』など

※第Ⅰ段階は魏皇帝による「銅鏡百枚」に対応。
 ※第Ⅱ段階以降は都洛陽まで遣使して下賜されるのではなく、帯方郡への朝貢で下賜されたものと推定（三角縁神獣鏡半島製作説）。したがって、三角縁神獣鏡の下賜は楽浪・帯方郡滅亡以前まで。
 ※これまで仿製三角縁神獣鏡と呼ばれていた第Ⅴ段階も一連の工人の作鏡。船載鏡の範疇で考えられつつある。

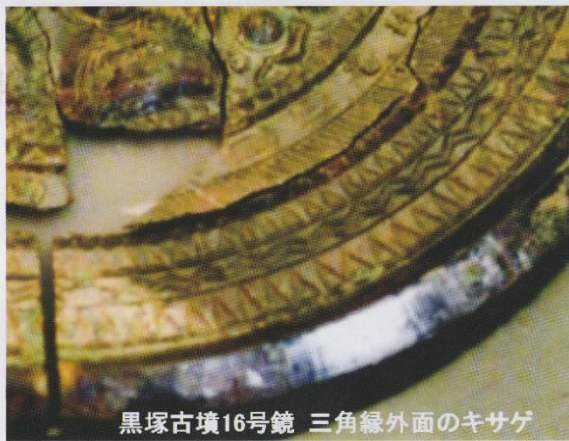
15

16



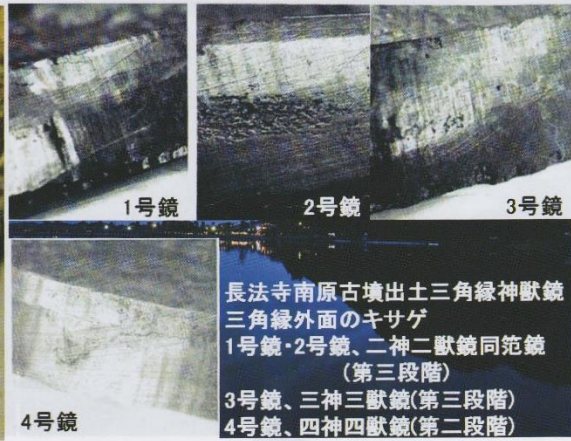
17

18



黒塚古墳16号鏡 三角縁外面のキサゲ

19



1号鏡

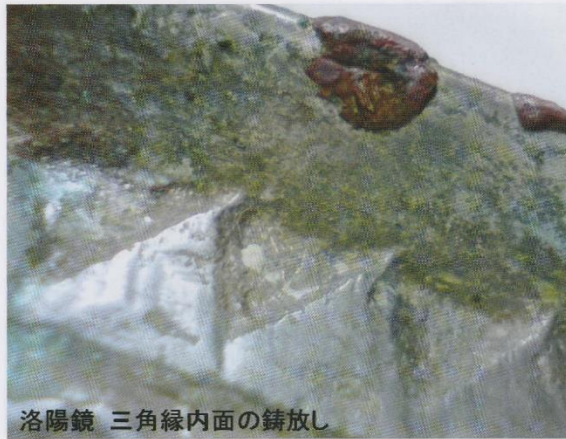
2号鏡

3号鏡

4号鏡

長法寺南原古墳出土三角縁神獸鏡
三角縁外面のキサゲ
1号鏡・2号鏡、二神二獸鏡同范鏡
(第三段階)
3号鏡、三神三獸鏡(第三段階)
4号鏡、四神四獸鏡(第二段階)

20



洛陽鏡 三角縁内面の鑄放し

21



黒塚古墳16号鏡 三角縁内面の鑄放し

黒塚古墳1号鏡 三角縁内面の鑄放し

黒塚古墳17号鏡 三角縁内面の鑄放し

22

場鏡 外区鋸齒紋のキサゲ・内区鋸齒紋の鑄放し



23



黒塚古墳6号鏡 外区鋸齒紋のキサゲ

黒塚古墳2号鏡 外区鋸齒紋のキサゲ

24



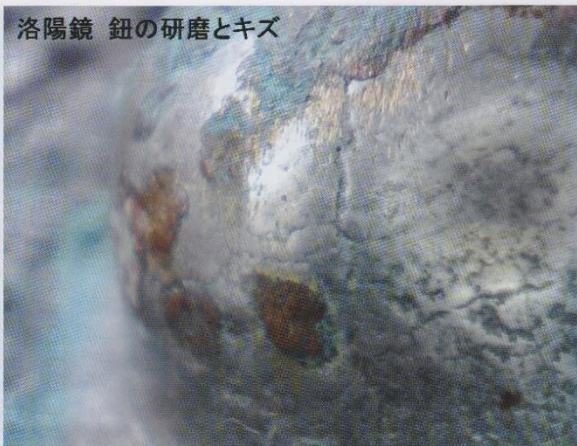
25



26



27



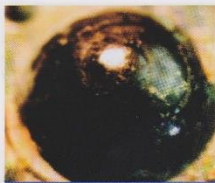
28



29



30



椿井大塚山古墳
23号鏡方形紐孔の鑄放し



椿井大塚山古墳16号鏡 方形紐孔の鑄放し

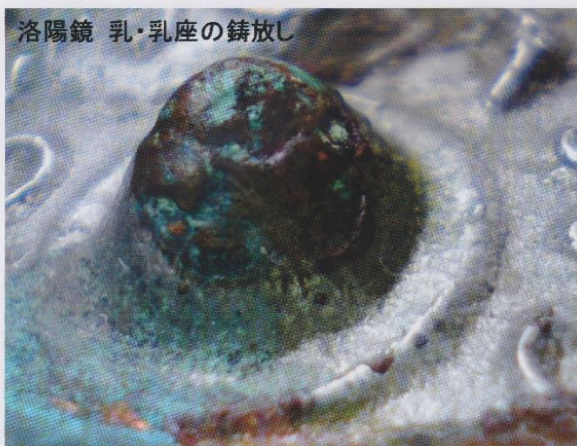
31

黒塚古墳23号鏡 円形の紐孔



32

洛陽鏡 乳・乳座の鑄放し



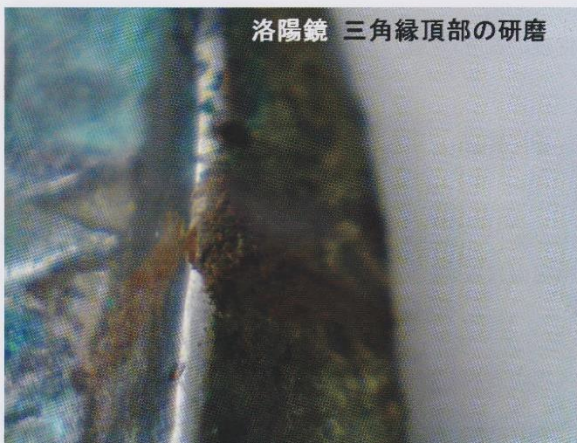
33



黒塚古墳17号鏡 乳の鑄放し
椿井大塚山古墳29号鏡 乳の研磨

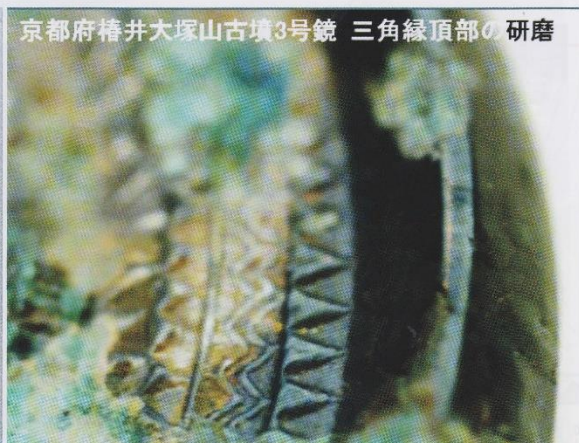
34

洛陽鏡 三角縁頂部の研磨



35

京都府椿井大塚山古墳3号鏡 三角縁頂部の研磨

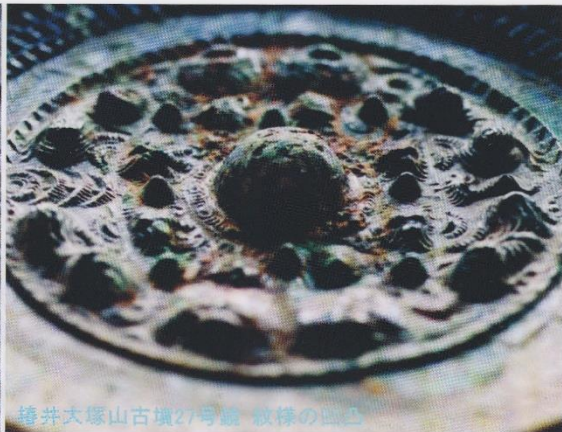


36



洛陽鏡 紋様の凹凸

37



埴井大塚山古墳27号鏡 紋様の凹凸

38



洛陽鏡 三角縁外面の細線跡

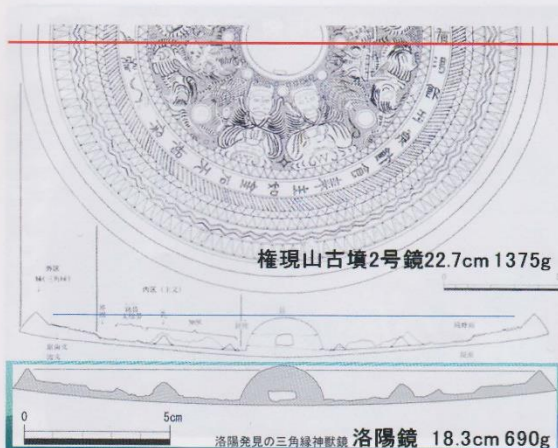
39



面反り

洛陽鏡 鏡面のサビ

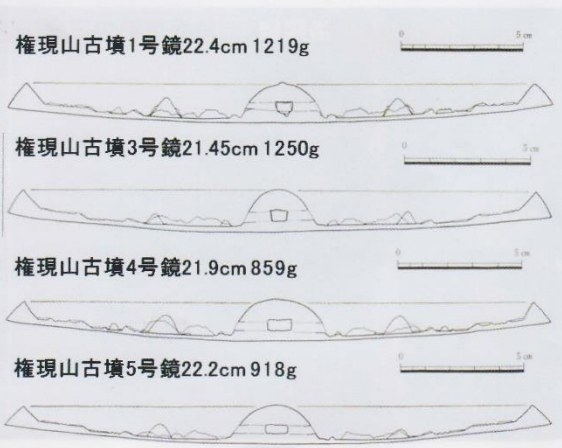
40



権現山古墳2号鏡22.7cm 1375g

洛陽発見の三角縁神獸鏡 洛陽鏡 18.3cm 690g

41



権現山古墳1号鏡22.4cm 1219g

権現山古墳3号鏡21.45cm 1250g

権現山古墳4号鏡21.9cm 859g

権現山古墳5号鏡22.2cm 918g

42

(2) 講演の要旨

① 概要

論点の三角縁神獣鏡は日本出土の三角縁神獣鏡と多くの点での共通点が指摘されていた。「吾作」銘で七言律の長文を刻み、五段階区分の第Ⅱ段階の要素が整うものである。ただし、発掘調査による資料ではなく、公表後は真偽を含め、日本では大きな議論となっている。一見して外縁のそそり立つ三角縁の形状や、内区主紋様の神像・獣像・笠松紋様などの特徴から日本出土の三角縁神獣鏡と多くの点での共通点が指摘されていた。また、「吾作」銘の長文を刻み、日本出土三角縁神獣鏡の中には字句や字体によく似たものが散見される。

② 実見の内容

①2015年11月25日に洛陽鏡を実見、詳細な写真撮影・断面実測を行い、写真などではわからない新たな知見を得た。

②外縁・外区・鈕・乳などのキサゲ(切削・砥ぎト研磨・鑄放しの状況が日本出土の第Ⅰ、第Ⅱ段階の三角縁神獣鏡と多くの点で共通することを確認した。また、強い面反りの特徴についても、日本出土の第Ⅰ、第Ⅱ段階の三角縁神獣鏡と共通する。以上より、洛陽鏡は三角縁神獣鏡工人による製作である可能性が極めて大きい。

③洛陽鏡の鏡面は中原の出土鏡特有の硬い赤サビ(第二酸化銅)に覆われ、わが国出土鏡や華中地域などの出土鏡と分別できるものだった。

④この洛陽鏡は二つに割れており、有機溶剤などで接着・補修されていた。これらの特徴は、従前に日本で発見されたものが中国に持ち込まれたものではありえず、近年洛陽で出土した伝を何ら否定する要素はない。

以上について、郝本性氏(河南博物院前所長)、張錯生氏(河南博物院研究員・『中原文物』副主編)などにも報告を行い、確認を得た。

③ 問題

①この洛陽鏡は発掘調査による資料ではなく、王氏は「近期在洛陽發現」と記すのみで詳細は不明だった。その結果、公表後は真偽を含め、日本では大きな議論となっている。

②西河氏や一部マスコミ機関は王氏へのメールなどで、いつ、どのような状況で出土したものか問い合わせ、いくつかの情報を得ている。今回、これらの情報を大幅に変更する新たな要素はない。

③河南博物院関係者からの情報によると、漢魏洛陽城周辺にも大規模な墳墓群があり、あまり調査されていないこと、現在その東側で墳墓群を調査していることなどを知った。

④これらの墳墓群の時期については後漢から魏・晋代が中心となるものの、時期決定はむしろ出土鏡が頼りになっているようである。また、白馬寺の西側では直径約50mの墳丘をもち、玉衣や渡金金具が出土した後漢末期の大型磚室墓が発掘されており、出土地伝承の付近に大型墓があった可能性も大きい。

④ 実見前にわかっていたこと

まず、実見前に写真などから確認できていることの概要を記す。

① この洛陽鏡は直径18.3cm、内区に四人の神像と四匹の怪獣を刻み、銘帯に「吾作明竟(鏡)真大好(以下省略)」の長文を刻む。外区は二重の鋸齒紋帯の間に複線波紋帯を刻み、

外縁はそそり立つ三角縁である。三角縁神獣鏡の中でも「吾作」銘三角縁四神四獣鏡と呼ばれる部類である。

- ㊤ これまで発見されている三角縁神獣鏡は直径 20～22cm がもっとも多く、小型のものは直径 17.1cm が三種、18.0 cm が一種のみで、洛陽鏡の直径 18.3cm は最小クラスである。ただし、最大のものは 26.1cm が一種、25.8cm が二種あり、20～22cm を基準にすれば、ばらつきの範疇である。

- ㊦ 銘文は近似するものに

- ㊦a 奈良県新山古墳 6 号鏡の

「吾作明竟甚大好 上有神守及龍虎身有文章口銜巨 古有聖人東王父西王母 渴飲王全（玉泉飢食棗）五男二女 長相（保）大吉昌」、

- ㊦b 大阪府安満宮山古墳 1 号鏡の

「吾作明鏡 練取好同 文章皆 □師□工 上有東王父西王母師子辟邪甚口巨 …… 位至三公 甚樂兮」がある（太字は共通する銘）。

「上有聖人東王父西王母」銘は「吾作」銘三角縁神獣鏡に特有で、この種の中国鏡の銘は通常「上有仙人四海遊」である。

- ㊧ 図像は複像式で、四つの乳は大きい装飾はない。笠松紋の省略具合を含め、第 II 段階の要素に適合する。さらに、神像の頭飾りや膝下の装飾、怪獣のつり上がる眉や巨を咬む表現は「吾作」銘環状乳神獣鏡の神像や怪獣に酷似する。

- ㊨ その他特徴

この洛陽鏡は銘帯が太く、銘文の一字一字が大きい。これは、銘帯の外側に通有刻まれる櫛歯紋帯が省略されているためである。もともと半分の幅で内側に銘、外側に櫛歯紋帯を刻む予定と考える。

銘帯の中央に鋳型に刻まれたケガキ線が明瞭に残る。銘帯をそなえ、櫛歯紋帯を省略する中国鏡は知られず、**鏡の構成要素から著しく逸脱**する。一見して粗悪な贋作とも受け留められるが、三角縁神獣鏡にはこのような逸脱が数多く見られる。例えば、銘帯の中に小乳や方格を刻んだり、銘文の代わりに複線波紋帯や唐草紋、双魚紋などの図像を描く場合がある。これらの他の**中国鏡にはない構成要素の逸脱**である。

- ⑤ 実見によって新たにわかったこと

- ① 贋作と言えない要素

- ㊦a 中国鏡や三角縁神獣鏡の複製品・贋作の作成は型取りやスキャニングが発達した現代の技術をもってすれば、容易である。このようにして作成された複製品と原鏡を比べた場合、明らかに異なる部分がある。それは**鏡の仕上げ工程の痕跡**である。

- ㊦b 鋳あがった鏡は細部が切削や砥ぎによって鋳肌面が平滑にされ、鋳バリなどが除去される。鏡面も平滑にされる。これをキサゲと呼んでいる。さらに研磨によって磨かれて美しい光沢を放つようになる。キサゲ・研磨は鏡種や時期、鋳肌の特徴によって技法や施される部位などが大きく異なる。キサゲ・研磨がどのような工具でどういう技法で行われたのかは現代となっては知るべきがない。

つまり、複製品のキサゲ・研磨は現代の工具による素人工の推測であり、古代の工具を使う熟練工が作った鏡とは峻別できるのである。

そして、三角縁神獣鏡は他の中国鏡にみられない特異なキサゲ・研磨の特徴をもつことが知られる。これは三角縁神獣鏡の製作工人が閉鎖的で、独自の工具を使っていたことを示唆する。

㊥ 製作段階

洛陽鏡は三角縁神獣鏡のなかでも第Ⅱ段階である。現在、第Ⅱ段階の日本出土三角縁神獣鏡は 60 種 153 面ある。第Ⅰ段階は 28 種 77 面である。大半の鏡はサビに覆われ、キサゲ・研磨の詳細を確認できない。しかし、著者は 100 面以上の三角縁神獣鏡について、キサゲ・研磨の特徴を観察し、把握してきた。今回の実見・観察はその対比が中心である。写真や拓本から確認できなかったことでもある。

㊦ 日本出土三角縁神獣鏡の特徴（との比較）

日本出土の三角縁神獣鏡の三角縁は

- a 内面・外面ともキサゲ後、よく研磨して平滑にするもの、
- b 内・外面をキサゲしたあと研磨せず、キサゲの痕が明瞭に残るもの、
- c 外面のみをキサゲして内面は鑄肌面をそのまま残すものがある。

そして、多くは c の特徴を示す。b・c の三角縁外面は通常中国鏡にはほとんど見られない波紋痕跡が明瞭にみられる。波板痕などと呼んでいる。そして、洛陽鏡は c の特徴で、外面に波板痕が明瞭に残り、内面は鑄放しとなっていた。

㊧ 外区紋様帯

外区紋様帯の鋸歯紋帯・複線波紋帯は通常中国鏡ではキサゲ後に丁寧に研磨され、平滑にされる。三角縁神獣鏡もこの約束事に準拠するものが大半で、ごく一部に鑄放したままのものがある。ただし、約束事に準拠する場合も研磨が粗く、キサゲの波板痕が残る鏡は数多い。洛陽鏡の場合、よく研磨された部分とキサゲの波板痕が残る部分が半々程度あり、三角縁神獣鏡の特徴によく合致する。

㊨ 内区紋様帯

三角縁神獣鏡に特徴的な内区紋様帯にある鋸歯紋帯は大半が鑄放したままで、キサゲ・研磨されることはない。この特徴も洛陽鏡に合致している。

㊩ 鉦・鉦座と乳・乳座

鉦・鉦座と乳・乳座について、中国鏡の場合、いずれも全面を丁寧にキサゲし、鉦と乳のみ研磨仕上げし、鉦座と乳座はキサゲ痕跡を明瞭に残すことが多い。しかし、三角縁神獣鏡の場合、この約束事に準拠する鏡もあるが数は少ない。多くはキサゲせずに鉦と乳を粗く研磨するのみである。むしろ、鉦・鉦座と乳・乳座ともまったく鑄放したままの鏡が目立つ。洛陽鏡は鉦・鉦座と乳・乳座をキサゲせず、鉦のみ粗く研磨する。三角縁神獣鏡の仕上げ技法にあてはまるのである。

㊪ 鈕孔（鉦孔）

三角縁神獣鏡の鉦孔は長方形と解説されるが、一部に円形もある。いずれも鉦孔の周りは切削形成されることなく、鑄放しが多い。洛陽鏡も長方形で鑄放している。鉦孔内に鑄物砂や紐は残らず、内部の空洞にサビが及んでいた。

㊫ その他、洛陽鏡の個性として三角縁の頂部を磨いて 2 mm 程度の面を作りだしている。これまでに知られる大半の三角縁神獣鏡は三角縁の頂部で手が傷つくくらい鋭くとがる。ただし、京都府椿井大塚山古墳出土 3 号鏡のように 2 mm 程度の面をなす研磨のものも

知られ、洛陽鏡と共通する。

⑥ 実測による確認

㊦ 絹織物の痕跡

三角縁外面の一部と鏡面の一部に絹織物の痕跡がみられた。たいへん緻密で細い糸の痕跡が面的にあり、絹織物と思われる。王氏によると中原の中国出土鏡で絹織物の痕跡が残る鏡もいくつか知られるという。

㊧ 面径 実測図作成にあたり、あらためて面径は 18.3cm であると確認した。

㊨ 重量 重量は簡易量りの計測で現状 682g である。この重量から踏み返し鏡を否定する鏡胎の薄さが確認できる。

㊩ 鏡面 洛陽鏡の鏡面の反りは大きい。ただし、通常中国鏡に比べ、三角縁神獣鏡の多くは面反りが大きい。断面図では三角縁の頂部を結んだ線に鉦の大半が隠れ、ほんの少し鉦の先端がでる程度である。洛陽鏡もほぼ共通する結果が得られた。

㊪ 赤サビ

その他、洛陽鏡の鏡面は中原の出土鏡特有の硬くて厚い赤サビ(第二酸化銅)に覆われていた。紋様面は製作時の光沢を残す銀白色が大部分に保たれている。乾燥した土壌からの出土が推定される。日本出土の鏡のサビは、石室に雨水などとともに落下した酸性土で錆化したり、木棺を被覆する海成由来の粘土のアルカリで錆化したり、複雑な様相を呈する。概して、土壌水分の影響から製作時の光沢は失われ、錆化はなはだしいものばかりである。

対して、華中地域の出土鏡は漆黒色に変色し、破断面が鉛色になることが多い。これは長期にわたり水浸かりが続き、銅イオンが錆化せずに溶けだし、鏡の表面の錫が漆黒色に錆びたためと考えられている。以上のサビの特徴からも出土地を分別できる。

㊫ 補修

また、洛陽鏡は二つに割れている。おそらく破面はパンダ付けされ、塩化ビニル系の塗料に砂礫を混ぜて簡易に補修を隠したようだ。これらの特徴も、従前に日本で発見され、日本の骨董商人の手を経て中国に持ち込まれたものとは考えにくい。近年中国で出土した伝を否定する要素とならない。

⑦ 要約

以上を要約すると、通常中国鏡、日本出土三角縁神獣鏡、洛陽鏡のキサゲ・研磨の技法を比較した場合、通常中国鏡の技法に対し、日本出土三角縁神獣鏡と洛陽鏡に著しい共通性がみられる。具体的には、

㊦ 三角縁外面にはキサゲの波板痕が残り、内面は鑄放したままであること、

㊧ 外区紋様帯の鋸歯紋などはキサゲ後粗く研磨し、内区紋様帯の鋸歯紋は鑄放したままであること、

㊨ 鉦・鉦座と乳・乳座はキサゲせず、鉦のみ粗く研磨し、他は鑄放したままであること、

㊩ 面反りが急で三角縁頂部を結んだ線に鉦の大半が隠れ、鉦の頂部がほんの少し出る程度であること、などである。つまり、洛陽鏡が本物であることは疑う余地がない

かりか、三角縁神獣鏡工人による製作である可能性が極めて大きいことを示している。

(3) 洛陽発見の三角縁神獣鏡の意義

最後に、中国で三角縁神獣鏡が発見された意義について私見を述べる。

① 三角縁神獣鏡の製造段階 筆者（西川寿勝）は

第Ⅰ段階の三角縁神獣鏡や関連鏡群に「景初三年」・「正始元年」・「景初四年」銘があることから、製作時期は239～240年、『魏志』倭人伝の「銅鏡百枚」と考えている。

第Ⅱ段階は狗奴国と交戦を報告し、黄幢を渡された正始四～六年(243～245)の朝貢時、第Ⅲ段階は台与による泰始二年(266)の朝貢時などと推定している。

第Ⅳ・第Ⅴ段階は紋様や銘文の崩れが著しく、西晋段階の鏡と推測する。正史に鏡の下賜が記載されないことから、帯方郡までの遣使によって、その地で下賜された鏡であると考ええる。

② 古墳との関係

さらに、古墳から複数の三角縁神獣鏡が発見された場合、第Ⅰ段階のみの構成は知られない。もっとも古い奈良県黒塚古墳・大阪府安満宮山古墳・兵庫県西求女塚古墳などでは、第Ⅰと第Ⅱ段階の鏡で構成されている。つまり、245年以降、266年までに古墳が成立し、三角縁神獣鏡の副葬が始まると考える。理化学分析（放射性炭素法）から推定された箸墓古墳や布留○式土器の年代観と、奇しくも合致している。

③ 洛陽鏡の製作時期

今回発見の鏡は第Ⅱ段階の構成でありながら、神像と怪獣の間を乳で分ける点、図像の隙間を珠紋で埋める点、銘文が大きな字で刻まれる点など、第Ⅲ段階の鏡によくみられる要素が先取りして出現している。そうすると、第Ⅱと第Ⅲ段階で下賜された鏡群の間に作られた過渡的鏡かもしれない。つまり、倭国に下賜されなかった時期の製作である。

既に三角縁神獣鏡は、わが国で500面以上が発見されている。分布の上では1面の資料によって、わが国の大和に分布中心があるという大勢に影響は及ばない。ただし、仮に三角縁神獣鏡国産鏡説に立ち、洛陽鏡が古墳時代のわが国に製作されて中原にもたらされたとしても、313年の高句麗による楽浪郡・帯方郡の滅亡によってその流通ルートが絶たれるので、第Ⅱ段階の製作時期は313年以前となるだろう。洛陽鏡は三角縁神獣鏡の製作地のみならず、古墳時代の開始年代を探るうえで非常に重要な示唆を与えるものである。

以上